障害を知る 共に生きる

～深めてほしい、障害への理解～

私たちは障害についてどのくらい知っているでしょうか
「障害を知り、共に生きる」ことの大切さ、それは周知の事実です
だけど、そのためには何をすればいいのでしょう
今回は、障害者を支援する団体や障害がありながらも活躍する人を取材し、
今、私たちにできることは何なのかを考えてみました

午前10時の休憩時間、会話がはずむ

本市の障害者数（市が発行する障害者手帳を有する人）は今年10月1日現在、2271人です。この人数からも分かるように、障害は決して特別なものではありません。私たちは障害をもっと身近に捉え、障害についての理解を深める必要があります。

障害には大きく分けて3種類あり、もっとも多いのが身体機能の一部に不自由がある「身体障害」です。このほか、知能を中心とした精神発達の遅れが幼少時期からある「知的障害」、精神の正常な働きが障害され、精神症状や行動の異常が出る「精神障害」があります。

市では、これら障害のある人たちが安心して暮らせるように、様々な取り組みを行っています。その一つが枕崎福祉作業所です。

「気づき」を大切に

11月中旬、枕崎福祉作業所で乾燥シイタケの茎切りや鰹節パックの袋詰め作業をする通所者の姿がありました。「NPO法人枕崎手をつなぐ育成会」が指定管理者として運営する同作業所は、在宅の障害者が、いきいきと暮らせる社会を目指すことを目的とした社会適応・生活習慣訓練の場です。昭和56年に設立された同作業所は、立神本町（駒場公園隣り）で開所し、今年4月に平田町に移転しました。現在、9人が通います。

所長の渡辺紀人さんは「無表情だった人が、作業はもちろん、年に2回開催される障害者スポーツ大会やレクリエーション活動に参加する中で、笑顔を取り戻しました。その姿を見ると、社会に出て人とふれあうことの大切さを改めて感じます」と話します。

一方で、家に閉じこもり、社会に交われない障害者が多くいるのではと危惧する渡辺さん。「行政のみならず、地域の方々の『気づき』が大切。地域全体で支援できる環境づくりが必要だと感じています」と話します。

地域コミュニティが薄れてきている現代において、身近にいる障害者に対し、無関心になることが問題なのかもしれません。

枕崎福祉作業所所長
渡辺紀人さん

台場公園で練習をする西村さん

今では「障害者でよかった」と思えるんです

～ Challenge ～

障害がありながらも、様々な分野で活躍する人はたくさんいます。その一人が西村勝哉さん（49）です。

西村さんは、10月に岐阜県で開催された全国障害者スポーツ大会の陸上男子200㍍で28秒36の大会新記録で優勝、さらに100㍍でも金メダルに輝きました。

現在、介護老人福祉施設「ピースフル立神」でマッサージ師として働く西村さんの視力は0・05ほどです。

突然の病、そして決心

西村さんは、枕崎中学校から鹿児島水産高校に進学し、卒業とともに地元カツオ一本釣り漁船で働いていました。視力の低下が気になるようになったのは、20代になってからでした。40代になると「普通じゃないな」と思うようになり、その後、生活に支障が出るようになりました。当時は「生きていても仕方がない」と思いつめた時期もあったと振り返ります。

しかし、妻子のある西村さんは「なんだかんだ言っても始まらない」と決心。知人からのアドバイスもあり、43歳で県立鹿児島盲学校に入学し、あんまマッサージ指圧師の資格を取得しました。中学校時代、陸上部に所属していた西村さんが障害者スポーツ大会の存在を知ったのもこの頃でした。

卒業後の平成22年から、ピースフル立神でマッサージ師として働く西村さん。入所者からの「ありがとう、気持ちよかったよ」の言葉にやりがいを感じると話します。

新しい生活が順調に進む一方、いまだに苦労することもあります。「バスでの移動はアナウンス頼みなので、上手く聞き取れずに乗りそびれたこともありました。歩道の点字ブロックの上に車が止まっていて困ることもしばしばです」と話す西村さん。視力が下がって初めて経験した不自由さに「ちょっとした思いやりに今はありがたみを感じます」と話します。

マッサージをする西村さん（ピースフル立神）

希望の眼差し

11月18日、台場公園で一人黙々と練習をする西村さんの姿がありました。きれいなフォームで軽やかに駆け抜ける姿はまさにアスリート。しかし、日差しの強い日中は、サングラスなしでは何も見えないと言います。

逆境を乗り越え、活躍の場を広げる西村さん。「全国大会に出場することなんて普通ないですよね。しかも、そこで金メダルをとれるなんて思ってもいなかったですよ。今では、障害者でよかったとさえ思えるんです。もう一度、全国の舞台で走りたいですね」と笑顔で話すその眼差しは、希望に満ち溢れていました。

西村勝哉さん（恵比須町）